

成果、課題、今後の展望

幌内炭鉱景観公園は、本格着手から4年、総工費わずか5万円で、年間 3,000 人が来訪する場となりました。

日常的な維持管理は、地元の元炭鉱マンを中心とする市民が担っています。多くの制約がある環境で協同作業を遂行するという、厳しい坑内労働で培った技を發揮し、埋もれていた地域資源を顕在化し、空間の質を着々と向上させてきました。



手伝いに来た大学生に実演しながら指導する元炭鉱マン

一般の人が持つ公園の概念とは異質なものであることは確かです。しかし、元炭鉱マンら市民による公園での作業は、坑内労働の再現にほかなりません。来訪者は、その現場に立ち会うことを通じて、炭鉱への愛着と誇り、独特な炭鉱コミュニティの真髄をうかがい知ることができ、普通の公園では見ることができない大きな魅力となっています。



2002年



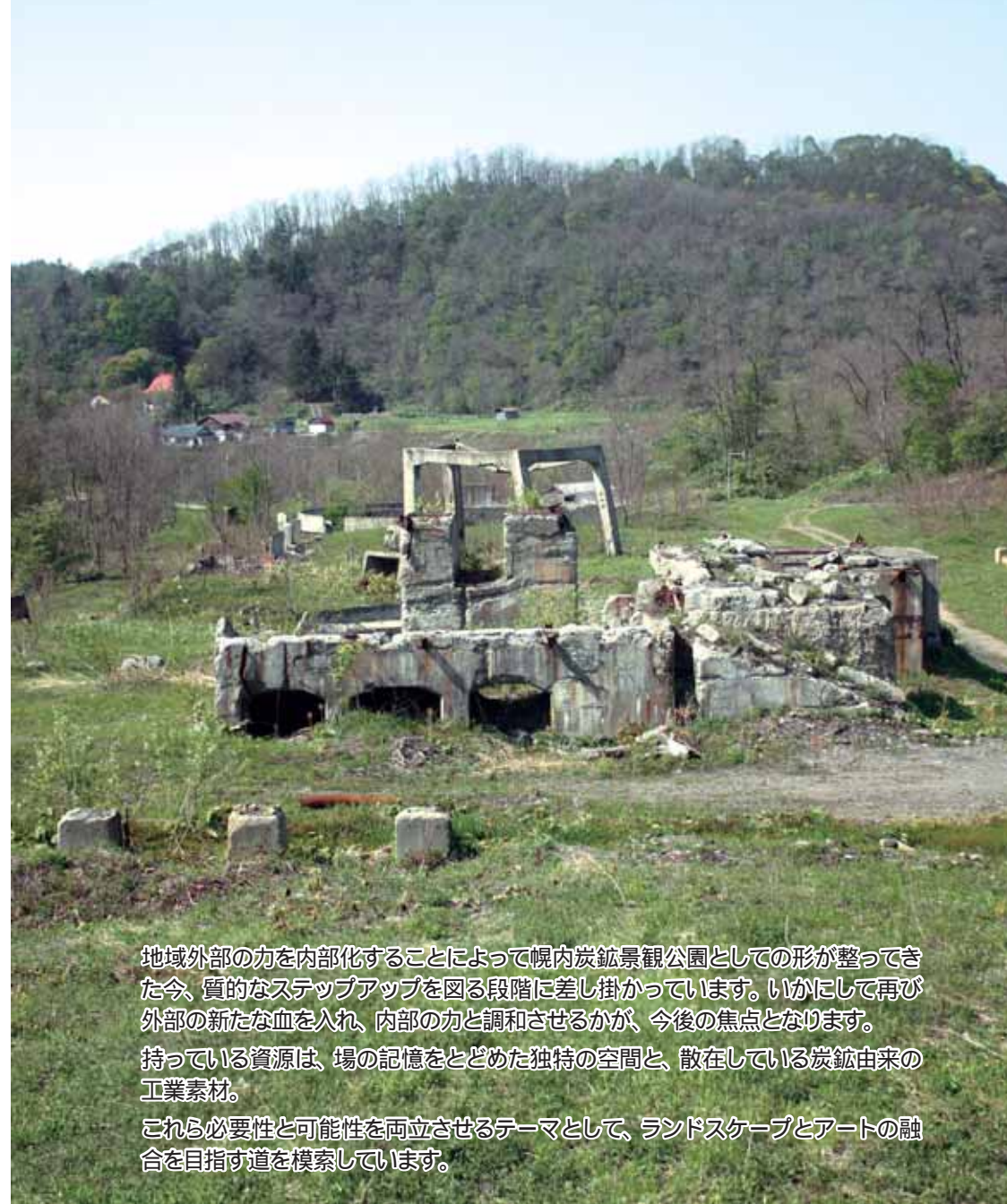
2008年

炭鉱遺産は、日々劣化しており、市民活動だけでは対応に限界があることも事実です。また、より多くの市民の参加は、遅々とした速度でしか進んでいないことも事実です。これからも、様々な課題が噴出するかもしれません。

しかし、幌内炭鉱景観公園では、今日もまた実践が続けられています。明確な意志と方向性を持って、プロセスの継続から得られるであろう創発的な効果を期待して、空知産炭地域での炭鉱遺産市民活動の象徴的な存在として力強く歩み続けるのです。



2006年に補修したものの今年で倒壊した幌内神社社殿



地域外部の力を内部化することによって幌内炭鉱景観公園としての形が整ってきた今、質的なステップアップを図る段階に差し掛かっています。いかにして再び外部の新たな血を入れ、内部の力と調和させるかが、今後の焦点となります。

持っている資源は、場の記憶をとどめた独特の空間と、散在している炭鉱由来の工業素材。

これら必要性と可能性を両立させるテーマとして、ランドスケープとアートの融合を目指す道を模索しています。

幌内炭鉱景観公園の情報は <http://www.horonai.com/>

市民の手でつくる

幌内炭鉱景観公園

地域の再生に向けて、地域固有の資産である炭鉱遺産を活用しようと、市民の手によって、幌内炭鉱景観公園の整備が進められています。

「粗大ゴミだ」「廃墟だ」「汚い」と言われ続けてきた空間は、毎年 3,000 人が訪れる場となりました。今日、ここでは様々なアクティビティーが展開され、地域内外の人を結ぶ新たなつながりが生まれています。

この取り組みは、みかさ・炭鉱の記憶再生塾によって 2001 年から続けられてきました。その主体はあくまで地元市民ですが、地域外の専門家や学生などからのサポートも大きな力となっています。なかでも、産炭地域として同じ文脈にあるドイツ・ルール地域との交流は、貴重な示唆を与えてくれました。

社会的な活動があるから空間が生きる、生きた空間があるから社会的活動が活発化する…。この「鶏が先か卵が先か」という関係を解きほぐし、一定の方向に向けて、ともかく現実を変えて行こうとする市民の取り組み。

具体的な表現の「場」としての幌内炭鉱景観公園をご紹介します。

位置・空間の概要

三笠市幌内地区は、札幌市の東北東約 50 km、夕張山系西縁の山間に位置します。

石狩川水系幾春別川の支流である幌内川に沿って、約 3 km にわたって展開する谷には、最盛期に約 15,000 人が住んでいました。しかし、現在の人口は約 780 名で、高齢化率は全市平均 40.0% よりも高い水準にあります。

幌内炭鉱景観公園は、幌内川の最上流部にあり、概ね南北 600m・東西 200m、約 10ha の範囲で、狭い谷底平地と比高 5 m 程度の何段かの河岸段丘によって構成されています。

かつては、揚炭坑口や選炭機など石炭生産の主要施設が立地し、その周囲には炭鉱住宅が展開していました。炭鉱閉山後は、居住人口はゼロとなり、ほとんどの施設が解体撤去され、自然が猛烈な勢いで取り戻しつつあります。



明治初期の炭鉱開発と幌内の位置

幌内炭鉱の歴史

幌内炭鉱は、1879(明治12)年、北海道で最初の近代炭鉱として官営で開鉱しました。1882(明治15)年には、わが国三番目の鉄道として、官営幌内鉄道(小樽市手宮~三笠市幌内)が開通しています。幌内炭鉱と幌内鉄道によって、北海道内陸部の開発は大きく進展しました。

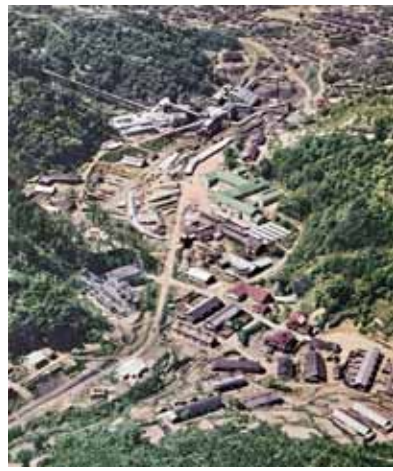
1889(明治22)年には、幌内炭鉱と幌内鉄道の払い下げを受けた北海道炭礦鉄道(後の北海道炭鉱汽船)の経営となり、1920年代には年間出炭50万トン規模まで発展しました。

1967(昭和42)年、深部化による能率低下の抜本解決策として、山を挟んで2km北側に幌内立坑を開削し、隣接区域を稼行していた北炭新幌内と統合した結果、1970年代には年産150万トン規模にまで成長しました。

しかし、1975(昭和50)年11月にガス爆発事故(死者24名)が発生、坑内火災を消火するため坑道を水封し、2年弱にわたり操業を休止しました。その後、生産を再開しましたが、出炭量は100万トン前後で低迷し、ついに1989(平成元)年9月に閉山しました。

現在、**幌内炭鉱景観公園**となっているエリアは、開鉱時に開削された音礮坑がある地であり、1967年の立坑統合まで、その周辺には入出坑の拠点として中核的な生産施設や炭鉱住宅が密集立地していました。1967年の立坑統合によって、居住中心は下流部へ移行しましたが、揚炭ベルト坑口や選炭機など一部の大規模生産施設が閉山まで残りました。

生産施設は閉山後に撤去されましたが、閉山時の混乱に紛れて産業廃棄物が不法投棄されたり、壊せなかったコンクリート基礎など残骸が一部に残るなど、市民は「ゴミ溜め」「廃墟」といったネガティブな評価しか持っていませんでした。



最盛期(1960年)の空撮写真 北海道炭礦汽船「北炭70年」所収



1975年に発生したガス爆発事故を伝える新聞記事



閉山後の状況(1992年)



操業時(1980年頃)と現在の同一地点の比較 矢印で示した構造物が同じもの

埋もれていた炭鉱遺産

閉山後、北海道炭鉱汽船は倒産し、炭鉱施設を完全に撤去できないまま、税金や貸付金の肩代わりに三笠市が土地を取得しました。

閉山対策として、一帯にテーマパーク「三笠鉄道村」を建設する構想があり、一部は具体化しましたが、バブル崩壊によって、その後の展開は中止されました。

行政・市民も意図しない中で、結果として炭鉱遺産が残され、放置される結果となりました。



写真は活動開始時(2001~2002年)のもの

価値発見の2001~2002年「幌内歩こう会」

北海道空知支庁の独自政策として展開していた一連の炭鉱の記憶事業を背景に、炭鉱発祥地という歴史的な文脈と炭鉱遺産を頼りにして、実践をスタートしました。

2001~2002年は、架設的な「場」として、幌内歩こう会を8回にわたって集中開催し、延べ253名が参加しました。市内外の炭鉱遺産に対する認識や知識差が突破口になると考え、多くの人々が時間・空間を共有し、《全く価値のない廃墟だ》という市民の言説と、《実際に多くの人々が興味関心を持つ》現実とを対比することを通じて、価値発見を目指しました。



多くの人々が参加した「幌内歩こう会」

ワークショップ

価値創造・表現の2003年~ ブロックハウス博士来訪と炭鉱景観公園

2003年以降は、価値創造・価値表現へのステップアップを目指して、**幌内炭鉱景観公園**という具体的な空間を持つ「場」の形成を通じて、社会的活動を巻き起こすことに主眼をおきました。

2003年7月、ドイツ・ルール地域で先行的に展開していたIBAエムシャーパークの取り組みを提示するため、ブロックハウス博士(レムブルック美術館館長)を招きました。博士の来訪に合わせて、廃墟と化していた歴史的建築物(幌内変電所)や選炭機跡地での順路の整備を行い、約120名が参加するフィールドワークを実施しました。

財政難から行政による具体的な空間整備は絶対無理だという一般認識に対抗して、市民自治的に空間整備に着手したことは、多くの人にインパクトを与えました。さらに、ルール地域と幌内との間に共通する(炭鉱)景観公園というコンセプトが明確に意識され、具体的な「場」としての空間形成に向かいました。



博士来訪に合わせて行った順路の整備

整備した順路を巡るフィールドワークの参加者

変電所特設会場でコメントするブロックハウス博士

2003年9月には、メンバー8名がルール地域を訪れ、ブロックハウス博士らと議論を重ねました。ここから得られた示唆をもとに、**幌内炭鉱景観公園**が明確なドメインとして意識され、これの具体化に向けた様々な活動を加速させました。

当初は地域外からの助力と刺激が相当のウェイトを占めていましたが、2005年以降は次第に地域内の市民が主体的に活動を担う局面が多く見られるようになりました。



ルール地域を訪問

応援に駆けつけた札幌市内の大学生

毎年開催している「線路の灯り展」

変電所での様々な催し

元炭鉱マンによるガイドツアー

地元市民が主体的に行なった変電所屋根の補修

取り組みのまとめ

